



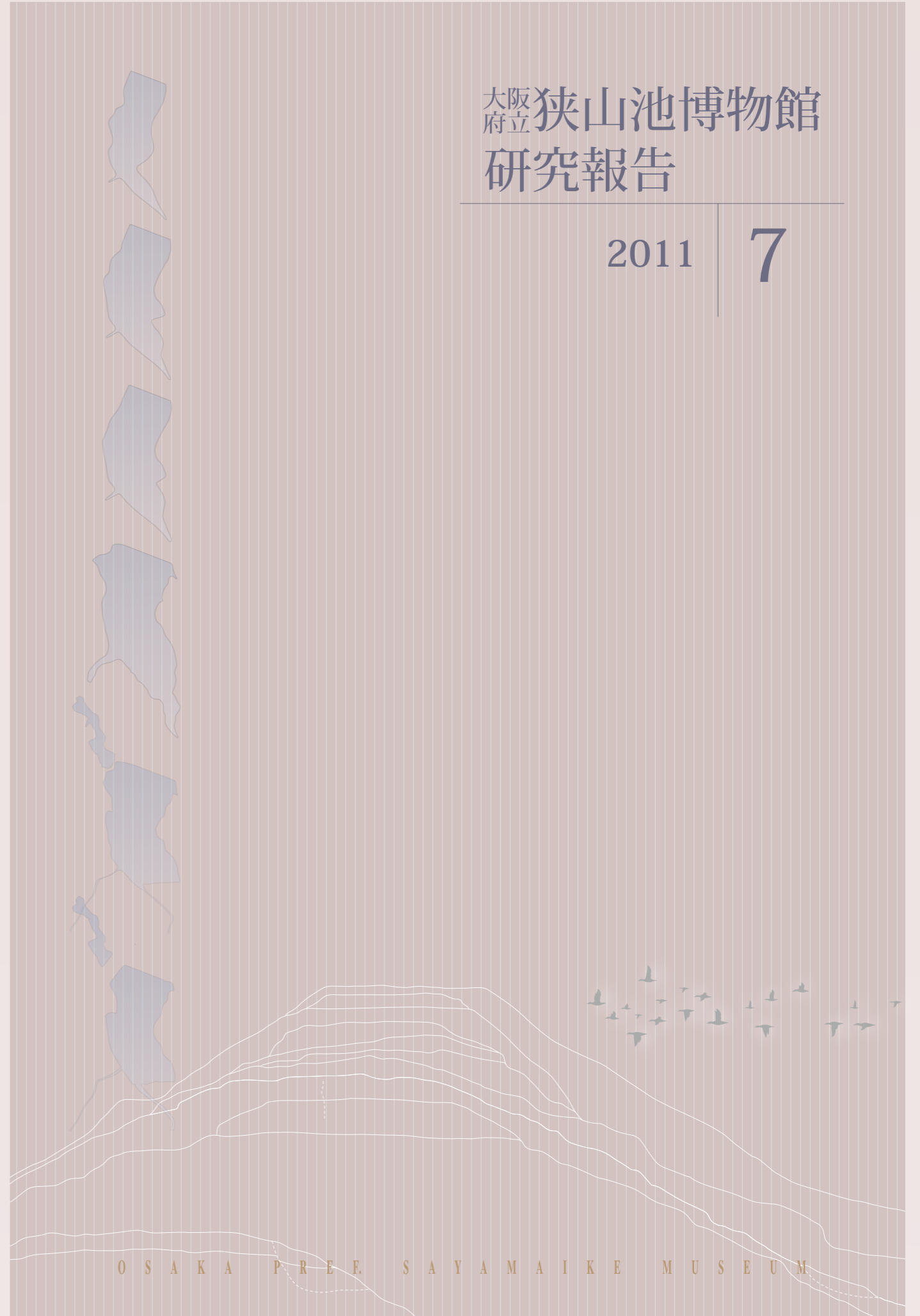
OSAKA PREF. SAYAMAIKE MUSEUM  
大阪府立 狭山池博物館

大阪府立狭山池博物館 | 研究報告 7 | O S A K A P R E F . S A Y A M A I K E M U S E U M

2011

# 大阪府立狭山池博物館 研究報告

2011 | 7



O S A K A P R E F . S A Y A M A I K E M U S E U M

## 目 次

ごあいさつ	工楽 善通	
金海鳳凰洞遺跡の堤防状遺構	蘇 培慶／平郡 達哉 訳	…… 5
南河内における古代道路		
－ 古代丹比地域における古代道路の復元－	岡本 武司	…… 17
池尻城跡成立期にみる南河内地域の土器様相		
－ 和泉型瓦器椀暗文の受容をとおして－	藤田 徹也	…… 35
古代の池を探る	工楽 善通	…… 47
東アジア沿海低地の開発方式	小山田宏一	…… 57
河内鑄物師の活動と重源	植田 隆司	…… 69

# The Research Reports of Osaka Prefectural Sayamaike Museum VII

## INDEX

Preface by the Director

- SO Bae Kyoung, “A Report about the Remains of Earthen Bank at Gimehae Bonghwang-dong Site”  
(Translated into Japanese by HIRAGURI Tatsuya) … 5
- OKAMOTO Takeshi, “A Study for The Ancient Roads in Southern Kawachi District -A Restoration of the Road Network in Ancient Tanpi Region-” …17
- FUJITA Tetsuya, “The Style of Unglazed Earthenware in Southern Kawachi District, at Time when Ikejirijo Fortress was built” …35
- KURAKU Yoshiyuki, “A Study for Ancient Ponds” …47
- KOYAMADA Koichi, “The Development of Watercontrol in the East Asian Coast Low Ground” …57
- UEDA Takashi, “The Relationship between the Activities of the Kawachi-imoji, (Founders Resided in Kawachi District in Middle Age) and Chogen, Famous Monk Who Devoted his Life for Restoring Todaiji Temple” …69

# 河内鑄物師の活動と重源

植田 隆司

## 1 重源の東大寺再興事業と狭山池改修

治承4（1180）年、南都東大寺の大伽藍は、源平の争乱の中、平重衡が率いる軍勢の焼き討ちによって灰燼へと帰した。その再興には20年以上の歳月を要した。後白河法皇の命と受け、九条兼実・藤原行隆らの公家、源頼朝らの武士、寺院、そして民衆の力を結集し、東大寺の再興を成し遂げたのは、俊乗房重源であった。重源は、その弟子である勸進聖たちや大工・石工・鑄物師などの技術者集団を率いて東大寺の再建を進めた。またその間、道路を整備し、港を修復して土地開発と経営を各地で続けた。彼が狭山池の大規模な改修を行ったのは、東大寺の再建が完了する前年、その生涯を終えるわずか4年前のことであった。

重源が周防・備前・備中・播磨などの主として瀬戸内海沿岸を舞台に展開した、さまざまな開発や事業のほとんどは、東大寺の大仏を鑄造して広大な伽藍を再建する、東大寺再興事業のために必要とされるものであり、それは、長期におよぶ巨大事業「東大寺再興プロジェクト」の一環として位置づけられよう。だが、狭山池の改修は、東大寺再興とはおよそ無縁の事業である。

狭山池の中樋から出土した重源狭山池改修碑をみると、「撰津河内和泉三箇國流末五十余郷人民之誘引」によって、82歳の重源が建仁2年の春に修復を計画し、2月から着工した旨が記されている<sup>(1)</sup>。また、末尾には重源の弟子たちの阿弥号と、「番匠廿人内」として東大寺再建に関わった大工らの名が記されており、長年、重源に付き従ってきたプロジェクトチームの技術者たちが、狭山池の改修にも参画していることがわかる。この東大寺再興のための技術者集団には、大仏を鑄造した河内鑄物師たちがいる。彼ら河内鑄物師たちの拠点集落は、重源に狭山池修復を請願した「五十余郷」の中に含まれ、改修による恩恵をもっとも享受する地域にある。下流域の人々の願いを叶えるために、彼ら鑄物師たちが重源との仲立ちをしたであろうことは想像に難くない。20年以上にわたる長期間、共通の目的のために苦楽を共にしてきた、重源と河内鑄物師たちの深い人間関係があつてこそ、重源は、溜め池の改修工事という寺院再興に関わりの無い事業を東大寺再興と同じく、奈良時代の僧行基の事績に倣う一環として実施することになったのではなかろうか。

本稿では、重源の東大寺再興事業と、鑄物師たちの活動について概観し、その関係性を考察し、その後の鑄物師たちの動向と歴史事象との関わりを確認する。

## 2 河内鑄物師の活動とその画期

### (1) 鑄物師の復活

我が国における金属器の鑄造は、弥生時代、渡来鑄造製品の模倣生産を端緒として始まる。飛鳥時代になると、仏教の伝来とともに新たな鑄造技術が伝えられ、仏像や仏具の鑄造が始まった。奈良時代には、東大寺大仏のような巨大な鑄造も可能となった。新しい鑄造技術の伝来と受容は、他の主要な渡来技術と同様に政治的あるいはその他の契機によって、波状的・間欠的に行われてきたのであろう。

寺院の梵鐘が日本国内で鑄造された確実な事例は、七世紀後半に遡る。新しい文化の受容に積極的であった飛鳥時代・奈良時代には、中国・朝鮮半島の鑄造技術者が頻繁に渡来し、我が国の鑄物

師たちの技術も高度に保たれていたに違いない。平安時代になると海外の文化を摂取することに消極的になるためか、寺院の梵鐘も10世紀後半を境にして、約200年の間、ほとんど鑄造が行われていないようだ。日常雑器等の小型製品は継続して鑄造されるものの、高度な技術と人員の組織力を必要とする大型製品鑄造のために必要な知識と経験は、我が国から一度失われてしまったようだ。このことは、後白河法皇の意を受けた藤原行隆が、養和元（1181）年に勅使として大仏の破損状況を検分した際、同行の鑄師10余人が「非人力之所及」と申し立てている様からも判断できる<sup>(2)</sup>。彼らは蔵人所に属する燈炉供御人と思われ、我が国を代表する鑄物師と言って過言ではなからうが、その彼らですら巨大な金銅仏を再鑄する知識も技術も持ち合わせていなかったのである。

重源は同年8月に東大寺造営勸進の宣旨を賜り、勸進による東大寺再興事業を開始した。だが、大型製品の鑄造技術を持たない日本の鑄物師たちだけでは、巨大な大仏を鑄造することは適わない。寿永元（1182）年、重源は、宋から九州の鎮西へ渡来していた陳和卿を招聘して宋の工人7人で大仏鑄造集団を編成し、その翌年2月から大仏の鑄造が始まった。当初は宋人達だけで鑄造が行われていたが、4月の大仏頭部鑄造からは、草部是助が率いる河内鑄物師14人がグループに加わった<sup>(3)</sup>。これに先行する3月には、草部是助が、重源と縁の深い上醍醐寺の大湯屋湯釜を鑄造している<sup>(4)</sup>。重源が是助ら河内鑄物師たちに課した実技試験のような趣旨であったのかもしれない。『玉葉』寿永3（1184）年正月5日条には、重源が「河内国鑄師」を鑄造集団に加えたことに対して、宋の工人に「不快之色」もあったが、重源の「誘」によって納得した旨が記されている。この後、大仏の鑄造は順調に進み、同年6月に鑄造が完了する。文治元（1185）年8月、後白河法皇自らが筆を執り、諸国から参集した多くの人々の中で、大仏開眼供養が盛大におこなわれた<sup>(5)</sup>。河内鑄物師たちは大仏の鑄造を通じて、宋の進んだ鑄造法を学び、我が国から失われていた大型製品の鑄造技術と知識を体得したのである。

大仏鑄造は完了したが、再興を果たすためには、大仏殿・廻廊・中門・南大門・東塔等を再築して伽藍を整えねばならない。このために大量の資材と莫大な費用が必要となる。開眼供養の翌年、法皇から東大寺造営料国として周防国を与えられた重源は、杣から建築資材となる木材を切り出し始める<sup>(6)</sup>。その後、周防国に加えて、東大寺領の播磨国大部荘、備前国を東大寺再興に必要な資金・資材の調達地として知行して、民衆に施しを行い、土地開発を進め、経営の安定化に努めた。



図1 重源と鑄物師の活動場所

大仏鑄造を終えた宋の工人と草部是助率いる河内鑄物師たちは再興事業に引き続き参画し、重源専属の技術者集団として活躍を続けた。

重源が東大寺の造営料国における活動拠点として建立した寺院のひとつに阿弥陀寺がある。周防における重源の活動を銘文に刻む国宝の阿弥陀寺鉄宝塔は、周防での事業が完了した建久8（1197）年に、草部是助ら河内鑄物師が鑄造したもので、重源と河内鑄物師たちの強い紐帯を感じさせる。銘文の末尾には、草部是助、草部助延、草部是弘の名が列挙してある。この銘文から、草部是助が「鑄大工従五位下行豊後権守」の官位を得ていたことがわかる。この年には東大寺別所の鉄湯船も草部是助が鑄造しており、彼らが東大寺再興事業に技術者集団の構成員として深く関与していたことが伺える。

重源が生涯の事跡を自ら記した『南無阿弥陀仏作善集』は、『備前国麦進未并納所下惣散用状』の紙背を利用している。重源が知行する備前国の「応輸畠地子麦」の建仁3（1203）年における実態を詳細に記す、この本来の表側の文書の中に「鼓物師河内権守是助給百七石 合百船賃并雑用料七石」とある<sup>(7)</sup>。「鼓物師」が「鑄物師」の誤記である可能性は残るが、この記述から、播磨浄土寺や東大寺等の銅鉦鼓も草部是助らによって鑄造されたとする見解もある。ともあれ、草部是助率いる河内鑄物師たちが、重源技術者集団の中で重要な仕事を成し、相応の給分を得ていたことは間違いない。同年、東大寺南大門と仁王像も完成し、東大寺総供養が行われ、東大寺再興は完了した。その3年後の建永元（1206）年6月6日、東大寺浄土堂にて、重源は86歳で没した<sup>(8)</sup>。

我が国から一度は失われてしまっていた、大型製品鑄造のための高度な技術は、重源と河内鑄物師たちの20年以上におよぶ大プロジェクトを契機として復活を遂げた。このあと、河内鑄物師たちは100年以上にわたって日本各地で活動を展開していく。重源が東大寺再興事業を開始した養和元（1181）年から彼が没した建永元（1206）年までの期間は、鑄物師の技術力が大きく向上し、彼らの活動範囲も瀬戸内海沿岸全域に拡大した非常に重要な時期である。この時期は中世における鑄造活動の1期として位置づけられよう。

## （2）鑄物師の出吹きと移住

重源没後の13世紀前半、鑄物師たちは10世紀以来の蔵人所に属する燈炉供御人として、おもに鍋・釜などの日常雑器を鑄造して売り歩く鑄物師「右方作手」と、大型製品を現地へ出向いて鑄造する「左方作手」に分派していたという。彼らは諸国を経巡る際に、布・絹・米・小麦・大豆なども交易したようだ。草部是助が率いた重源技術者集団の流れを汲む鑄物師たちは、東大寺再興事業で活発に往来した瀬戸内海を廻船して沿岸で大型品を出吹きし、小型の鑄造製品を搬送し、併せて交易活動も手掛けていたのであろう。

建長4（1252）年、鎌倉大仏の鑄造が始まり、弘長2（1262）年頃に完成する。この新大仏は、丹治久友をはじめとする河内鑄物師たちが鑄造した。この少し以前から、新しい武士政権の中核地である鎌倉近傍の関東各地と、対外防衛の要、鎮西探題のある北部九州地方への鑄物師たちの移住が進み、地方鑄造センターが成立したようすが遺跡の発掘調査成果から伺える。この時期の埼玉県金井遺跡・埼玉県金平遺跡・福岡県銚ノ浦遺跡などは、鑄物師が定住して活動を展開した鑄造センターだと考えられている。出吹きによる鑄造活動から、こうした地方へ移り定住しての鑄造活動への変化は、鎌倉幕府からの政治的な要請によるところが大きいのではなかろうか。これを象徴する大型鑄造製品である鎌倉大仏の鑄造開始年を画期として、重源没後からそれまでの期間を2期、



図2 鑄物師の移住と地方鑄造センターの形成

それ以後を3期として、中世における鑄造活動を捉えたい。

鎌倉大仏が完成した弘長2（1262）年。左方作手の鑄物師たちを束ねる惣官は、左方作手惣官の中原光氏であることをあらためて確認する旨の通達が、藏人所から出されている。鑄物師たちが許可なく地方へ移住するなど、惣官が掌握できないほど、鑄物師組織の瓦解が進行していたとする見解もある。

北部九州の中核地、大宰府政庁は12世紀後半に廃絶したと考えられているが、文永11（1274）年に元が来寇すると、この地の防衛拠点としての重要性が再認識され、のちに鎮西探題が設置される。この地域の鑄造センター、鉾ノ浦遺跡は13世紀後半に成立する。仏像・仏具・日常雑器等を鑄造するとともに、7種類もの梵鐘を量産していたようだ。発掘調査では、溶解炉・鑄造土坑などの鑄造施設がセットになったブロックが集合した鑄造センターのようすが判明している。また、『薩摩藩旧記』には、弘安7（1284）年に「大宰府住人丹治恒頼」が島津久経の依頼で薩摩浄光明寺の梵鐘を鑄造したという記述がある。この梵鐘は現存していないが、鉾ノ浦の鑄造センターで生産された梵鐘が九州各地へ運ばれていたようすが伺えよう。

鑄物師たちの地方定住化が進行した第3期であるが、従来どおり、鑄物師たちが本拠地の河内から出吹き・輸送を継続していたのもまた事実だ。香川県小豆島の長勝寺に伝わる梵鐘は、建治元（1275）年に鑄造されたもので、銘文に「大工河内国舟那（丹南）郡黒山郷下村住人平久末」という鑄物師の名があり、黒山郷（堺市美原区）の鑄物師たちが瀬戸内海を往来し、この梵鐘の鑄造したことを物語る資料である<sup>(9)</sup>。

### 3 鑄造点数の変遷とその背景

中世における鑄物師たちの鑄造活動が、重源が東大寺再興事業を開始した養和元（1181）年から彼の没年の建永元（1206）年までを1期、鎌倉大仏の鑄造が開始された建長4（1252）年以前を2期、以後を3期として大別できることを先に述べた。1期は日本の鑄造技術が復活・向上し、鑄物師たちの活動範囲が拡大をみた時期、2期はこの活動範囲を中心に吹きと交易を継続した時期、3期は鑄物師たちが河内から関東と北部九州へ移住し、その地に鑄造センターを形成した時期と概括するこ

とができる。図3は鎌倉時代の大型鑄造品の鑄造点数を近畿地方以西と東海地方以東に分類し、時系列でグラフ化したものである<sup>(10)</sup>。

図中の西暦1180年以前は大型品の鑄造が確認されていない。1181年に東大寺再興事業が開始されると、それに伴う草部是助らの鑄物師集団の活動が盛んとなり、1198年までに計8点の大型品が鑄造される。

2期に入ると、近畿地方と瀬戸内海沿岸地域で、丹治姓・土師姓・草部姓の鑄物師たちがおもに梵鐘を鑄造し、2期の42年間に鑄造された大型品は9点を数える。また、2期からは東国での鑄造活動も開始され、1227年に源吉国が神奈川県（現）の星谷寺鐘を鑄造したのを端緒に、梵鐘4点が東海以東の地域で確認できる。

1252年の鎌倉大仏の鑄造開始以後、鑄物師たちの活動はひとつのピークを迎える。1264年までの13年間に於いて、近畿地方以西では7点、東海以東では6点の大型品が鑄造されている。元寇以前、鎌倉幕府による安定した統治が行われていた時期に相当し、西国・東国ともに梵鐘を中心とした大型品の需要が大きかったのであろう。ところが、1274年の文永の役以後は、東海以東の地域における大型品鑄造数が激減する。それ以後、元弘3（1333）年に鎌倉幕府が滅亡するまでの約60年間で、この地域において確認できる梵鐘の鑄造数はわずか3点のみである。これに対して、近畿以西ではこの間に23点もの梵鐘や鉄湯船が鑄造されている。こうした西高東低の鑄造状況は、南北朝期以降も継続しているようだ。無論、3期初めに関東で成立した鑄造センターは、日常雑器類の小型品を鑄造する等、その活動を継続していたことは容易に推測される。だが、東国にこの時期の大型鑄造品が少ない事実は、寺院やそれを支える豪族たちの政治的・経済的な状況が、新たに梵鐘等の鑄造を依頼できる状況になかったことを示しているのではなかろうか。ともあれ、この時期、鎌倉幕府による統治の弱体化と軌を一にするかのように、鑄物師たちの大仕事の舞台は、ふたたび西国へ戻っていったと理解することができよう。

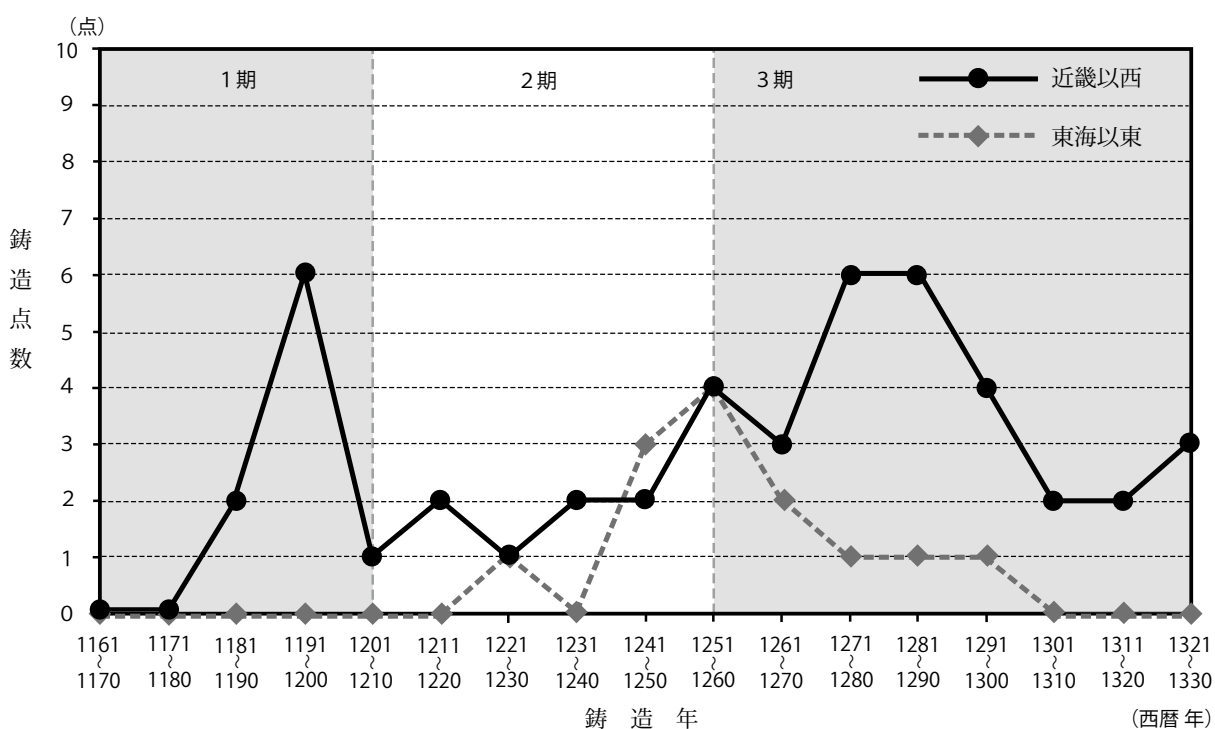


図3 大型品鑄造点数の推移



## 4 おわりに

重源は人々の期待を一身に背負い、勸進を行って人々の意志を一つにし、東大寺の再興を20年以上かけて完遂した。彼は内外の専門技術者たちを率いてその難業に挑み、それは結果として、日本の鑄造技術を復活させることとなった。宋の文化・技術を積極的に取り入れた彼のプロジェクトは、建築・美術等さまざまな分野に影響を与え、我が国の文化に画期的な革新をもたらした。重源がこのような統率力を発揮できたのは、我々の想像を遙かに超える当時の人々の仏に対する思いが存在し、これを束ねて仏の教えと結縁させ、さまざまな身分・職業・年齢・性別の人々の心を仏のもとに平等に幸福へ導くという大義を、この事業が持ち合わせていたためであろうか。

鎌倉時代に地方へ定住した鑄物師たちと、河内の鑄物師の郷から活動を続けた鑄物師たちの活動は、室町時代を経たその後、新たな局面を迎える。各地の戦国大名等の庇護下に入り、武器類を鑄造する役割を担っていく。天正4（1576）年には、真継家によって朝廷の権威を背景にした鑄物師たちの統制が開始される。このように、きわめて専門的な知識と経験に基づく技術が必要とされた鑄造活動は、その時代の政情に直接的な影響を受けた変遷過程を辿っていくのである。<sup>(11)</sup>

## 註

- (1) 『大阪府立狭山池博物館常設展示案内』第4版 39頁
- (2) 『東大寺統要録』造仏篇
- (3) 『玉葉』寿永二年四月十九日条
- (4) 『醍醐寺新要録』大湯屋篇
- (5) 『玉葉』文治元年八月二廿～卅日条
- (6) 『東大寺造立供養記』
- (7) 大阪府立狭山池博物館所蔵複製品を史料とし、大阪府立三国丘高等学校教諭 中山潔氏のご教示を得た。
- (8) 『三長記』建永元年八月八日条
- (9) 大阪府立狭山池博物館平成19年度特別展開催時、所有者である長勝寺 横手弘照氏のご厚意を頂き、展示品借用の際に実見する機会を得た。
- (10) グラフ作成の際のデータは、表1・2の鑄造品リストを基礎としている。なお、中世梵鐘の鑄造状況に関して、堺市立みはら歴史館 泉谷博幸氏のご教示を得た。
- (11) この小稿は、大阪府立狭山池博物館図録9『平成19年度特別展 国土を拓いた金物たち』2007年にて行った考察に新規の知見を加え、再検討したものである。

## 参考文献

- 『南無阿弥陀仏作善集』奈良国立文化財研究所 1955年  
小林剛『俊乘房重源の研究』有隣堂 1971年  
美原町教育委員会『河内鑄物師とその作品』1986年  
五十川伸矢「梵鐘の鑄造遺跡」『考古学ジャーナル』372 1994年  
五味文彦『大仏再建』講談社 1995年  
馬淵和雄「鎌倉大仏とは何か」『大航海』14 ダンスマガジン2月別冊 新書館 1997年  
杉山二郎『大仏再興』学生社 1999年  
美原町立みはら歴史博物館『オープン記念特別展 梵鐘の音は時を超えて-河内鑄物師の世界-』2003年  
奈良国立博物館『御遠忌八百年記念特別展 大勸進重源』2006年

西暦	東大寺・重源のおもな動向 おもな出来事	鑄物師の主要作品	鑄年(和暦)	鑄物師
1129		徳照寺鐘	大治4年	鑄造匠多治比頼友(再鑄)
1141		廃世尊寺鐘	保延7年	鑄師散位丹治比■(再鑄・鑄物師散位 船是守)
1167	仁安2年、重源入宋。平清盛、太政大臣に。			
1168	仁安3年、重源、宋西とともに帰国。			
1180	治承4年、源頼朝挙兵。 平重衡等の争乱で東大寺焼失。			
1181	養和元年、後白河院政の復活。平清盛没。 <b>重源、東大寺造営勸進の宣旨を賜わる。</b>			
1182	寿永元年、鎮西に滞在中の陳和卿を大仏鑄造に招聘。			
1183	寿永2年、大仏鑄造技術者集団に草部是助率いる河内鑄物師たちを加えて体制を整備。平氏西走。	上醍醐寺大湯屋湯釜・三寶院湯屋湯釜 〔醍醐寺雜記〕・〔醍醐寺新要録〕※現存せず		草部是助
1183～1184		東大寺大仏	寿永2～3年	草部是助ほか14名
1185	文治元年、重源、播磨国大部荘に入る。東大寺大仏開眼供養。頼朝、東大寺に黄金一千両寄進。同年(元暦2年)平氏滅亡。			
1186	文治2年、重源、周防国を東大寺造営料国として支配。袖から木材の切り出しを開始。翌年に阿弥陀寺建立か。			
1189	文治5年、源義経没。源頼朝、奥州平定。			
1190	建久元年、東大寺大仏殿上棟。 重源、播磨国大部荘の預所に觀阿(甥?)と如阿を任命。			
1192	建久3年、重源、播磨国大部荘の四至を定めた官宣旨の発注を受ける。→東大寺による大部荘経営の安定・復興 播磨浄土寺建立。 後白河法皇没。源頼朝、征夷大將軍となる。			
1193	建久4年、備前国・播磨国を東大寺造営料国として支配。	播磨浄土寺鐘〔浄土寺縁起〕		東大寺にて鑄造
1194	(播磨大部荘支配完成の2年後)→	浄土寺銅鉦鼓	建久5	草部是助か?
1195	建久6年、東大寺大仏殿・中門完成。東大寺供養・大仏殿落慶法要(一応の再建完了。後鳥羽天皇・頼朝出席)重源、大和尚となる。			
1196	建久7年、重源の申請により、魚住泊・大輪田泊を修復させる。			
1197	(周防支配から11年後)→	阿弥陀寺鉄宝塔	建久8	草部是助、草部助延、草部是弘
	建久8年、播磨別所 浄土寺薬師堂上棟。			
		東大寺別所湯屋鉄湯船	建久8	草部是助
1198		東大寺銅鉦鼓	建久9	草部是助か?
1199	正治元年、源頼朝没。東大寺南大門上棟。			
1202	建仁2年、重源狭山池改修。伊賀国に新大仏寺を建立。			
1203	建仁3年、東大寺南大門と仁王像完成。東大寺総供養(再建完了)。「南無阿弥陀仏作善集」作成。 聖徳太子廟をあばいた僧2人が、重源のとりなしで知行国の備前と周防へ配流される〔百鍊抄〕。			
1206	建永元年、重源、86歳で亡くなる。			
1210		金剛三昧院鐘(和歌山県伊都郡高野町)	承元4	鑄師 多治比則高
1215		東禪寺鐘(福岡県宮若市・朝町八幡宮)	建保3	坂田家守 (小倉鑄物師)
1216	建保4年、源実朝、陳和卿に造船を命じ、渡宋を計画。			
1219		長谷寺鐘(奈良県桜井市)※現存せず	建保7	鑄師 丹治比則俊
1223		屋島寺鐘(千光寺鐘、香川県高松市屋島)	貞応2	鑄師散位 土師宗友
1227		星谷寺鐘(神奈川県座間市)	嘉祿3	大工 源吉国
1231		日吉神社鐘(滋賀県伊香郡高月町、元・近江国伊香郡己高山)	寛喜3	大工散位 土師宗友
1234		布忍寺鐘(大阪府)※現存せず	文暦元	東大寺鑄物師 草部信時
1245		慈光寺鐘(埼玉県比企郡ときがわ町)	寛元3	大工 物部重光
1246		高野山大湯屋釜(和歌山県伊都郡高野町)※現存せず〔高野山文書〕	寛元4	丹治国高
		金剛山寺鐘(奈良県大和郡山市)	寛元4	鑄師大工 散位土師宗貞
1247		八社神社鐘(愛知県知多市、元・美州不破郡清水寺)	宝治元	東大寺大工散位 山河助清
1248		常楽寺鐘(神奈川県厚木市)	宝治2	不明
1251		石手寺鐘(愛媛県松山市道後、元・愛媛県周桑郡丹原町興隆寺)	建長3	大工 河内国丹治国忠

表1 1期～3期における世間の動向と鑄物師の活動

西暦	東大寺・重源のおもな動向 おもな出来事	鋳物師の主要作品	鋳年(和暦)	鋳物師
1252	建長4、鎌倉大仏鑄造(「吾妻鏡」) この頃から河内鋳物師の関東移住が活発化か？	鎌倉大仏		丹治久友ほか
1255		建長寺鐘(神奈川県鎌倉市)	建長7	物部重光
		般若寺鐘(山口県熊毛郡平生町)	建長7	大工 丹治助利
1257		荒川八幡鐘(常陸国多珂郡松原村)※現存せず(「新編常陸国誌」)	康元2	大工 丹治国光
		興隆寺鐘(周防国吉敷郡大内村)※現存せず(「長防風土記」)	康元2	鍛冶大工 丹治助利
		海住山寺鐘(京都府相楽郡加茂町、元・修禪院別院無量寿院)	正嘉元	鋳物師 丹治国忠
1260		養寿院鐘(埼玉県川越市、元・武蔵国河肥庄新日吉山王宮)	文応元	鋳師 丹治久友・大江真重
1262	弘長2、鎌倉大仏完成か？ 蔵人所、左方灯作手へ通達し、中原光氏が左方作手惣官であることを確認。(河内鋳物師たちの統制ができず、地方移住がかなり進行)	旧新楽寺鐘(堺市博物館寄託、元・大和国磯城郡多村秦荘)	弘長2	大工 丹治国則
1263		勝福寺鐘(神奈川県川崎市 元上総国望陀郡奈良輪村板戸神社「武蔵風土記稿」)※現存せず	弘長3	鋳物師 源有貞
1264		東大寺真言院鐘(奈良市雑司町)	文永元	鋳物師新大仏寺大工 丹治久友
		蔵王堂鐘(大和国金峯山下山)※現存せず(東京国立博物館所蔵 拓本)	文永元	大工鎌倉新大仏鋳物師 丹治久友・広階友国・藤原行恒
		長谷寺鐘(神奈川県鎌倉市)	文永元	大工 物部季重
1274	元寇 文永の役			
1275		長勝寺鐘(香川県小豆郡小豆島町、元・小豆嶋西方池田御庄滝水寺)	建治元	大工河内国舟那郡黒山郷下村住人 平久末
		般若寺鐘(茨城県土浦市)	建治元	大工 丹治久友・大工 千門重延
1277		菅山寺鐘(滋賀県伊香郡余呉町)	建治3	大工 左馬允丹治国則
		大歳神社鐘(和歌山県那賀郡桃山町)	建治3	大工河内国 平重永
		長楽寺鐘(河内国岸田堂)※現存せず	建治3	大工 左馬允丹治国則
1280		金剛峯寺鐘(和歌山県伊都郡高野町、元・河内国高安郡教興寺)	弘安3	大工 沙弥尊念
		本誓寺鐘(滋賀県長浜市、元・和泉国近木郷)	弘安3	大工 河内助安
1281	元寇 弘安の役			
1284		浄光明寺鐘(鳥津荘内薩摩方)※現存せず(「薩摩藩旧記」「三国名勝図絵」)	弘安7	鋳師大宰府住人 丹治恒頼
1285		大日寺鐘(和歌山県紀美野町、元・紀伊国那賀郡毛原庄朝日寺)	弘安8	東大寺鋳物師 大工 山川助永
1286		小網寺鐘(千葉県館山市・大莊嚴寺)	弘安9	物部国光
1287		大慈寺鐘(熊本県熊本市)	弘安10	
1288		道教寺鐘(大阪府貝塚市、元・河内国勝軍寺)	正応元	大工 山川助永
1290		智恩寺鉄湯船(京都府宮津市)	正応3	大工 山河貞清
		成相寺鉄湯船(京都府宮津市)	正応3	御鋳大工 山河貞清
1292		慈光寺鐘(大阪府東大阪市)	正応5	大工 山河貞清
1293	永仁元年、鎮西探題が置かれる。			
1296		醍醐寺鐘 ※現存せず(「醍醐寺新要録」)	永仁4	鋳物師 山河貞清
1298		東漸寺鐘(神奈川県横浜市区磯子区)	永仁6	大工大和権守 物部国光
		妙国寺鐘(岡山県和気郡備前町、元・紀伊国井上本庄)	永仁6	鋳治師河内国 白坂助友
1299		妙国寺鐘(高知県高知市、元・但馬国気多郡東楽寺)	正安元	大工 河内国 大春日重守
1303		金剛輪寺鐘(滋賀県愛荘町)	乾元2	大工河内国丹南郡黒山郷 河内助安
1306		安祥寺鐘(京都市山科区安祥寺町、元・摂州渡辺安曇寺)	嘉元4	鋳師河州旦南治部入道淨仏
1316		清水寺鐘(岡山県上房郡賀陽町湯山)	正和5	大工丹治是友
1319		真如寺鐘(大阪府豊能郡能勢町、元・山城国乙訓郡神足郷勝竜寺)	元応元	小工 右衛門尉山河助綱(大工清原得光)
1324		青岸渡寺鐘(和歌山県東牟婁郡那智勝浦町)	元亨4	大工河内国住人 河内介弘
1325		英賀神社鐘(兵庫県姫路市飾磨区英賀保、元・熊野山新宮権輿大雄禪寺)	正中2	大工河内国 □□□光吉
1327		神護寺鐘(山口県熊毛郡平生町大野、元・周防国大野平郡阿曾社)	嘉暦2	大工丹治国真「周防国大野平郡阿曾社洪鐘」銘

3期

大阪府立狭山池博物館 研究報告7

発行日 平成23（2011）年3月26日

編集・発行 大阪府立狭山池博物館  
〒589-0007 大阪狭山市池尻中二丁目  
Tel 072-367-8891 Fax 072-367-8892

印刷 株式会社 近畿印刷センター